故　名誉会員　田　井　九　一　氏　し　の　ぶ

田井家は兵庫県竜野市の旧脇坂藩の藩士であった。九一氏は明治 12 年5月に生れられ，御幼少の時東京に転住せられ日本中学校から旧制の第一高等学校を経て京都帝国大学土木工学科を明治 38 年3月に卒業せられ，同年7月に関西鉄道会社工務課に就職，会社が国営となって明治 42 年7月鉄道院西部鉄道管理局工務課勤務となられ，大正4年6月に福知山保線工事々務所長に，大正6年 12 月湊町保線事務所長に，11 年1月神戸鉄道局工務課長に転ぜられ関西方面の工務系の技術について活躍せられ，そして大正13年12月には鉄道院東京鉄道管理局，14 年8月には鉄道院札幌鉄道局工務課長，15 年 10 月には鉄道院仙台鉄道局等と幅広く活躍せられた。

昭和2年8月に欧米各国へ出張せられ，昭和3年6月鉄道省監督局技術課長に，同6年7月に退官せられ，爾来土木学会の理事として学会の運営に尽力せられましたが，それ以外の職にはつかれる事なく悠々自適の好境遇に恵まれ東京，大阪の御親戚を訪問せられ御姉妹の家庭にお孫さんを愛抱せられるのを楽しみとして居られた。

先輩のお名前を解析するのは礼を失する事でありますが承りますにお名前は〝九仞の功を一簣に虧く〟から命名せられたものとの事である。そのせいで慎重にして言葉少なくアノ濃い太い眉毛でニコニコして常に春風駘蕩の気の漂ようの感を人に与えられる温厚篤実の君子人であった。而して人に親切であった明治年代卒業の少人数の会合にいつも当時 90 才の那波光雄博士を同行し身を以って支えるようにして往復せられた。その頃御自身もすでに腰に梓の弓を張っておられた感があった。

昭和 39 年9月 21 日行年 85 才にして老衰による心臓障害にて逝去せられた。最早温顔を拝する事ができなくなったのは洵に遺憾の極みである。謹みて御冥福をお祈り申し上げます。

御長男　田井粱之氏は京都大学電気工学科を昭和8年に御卒業になりすでに新生電気会社に常務取締役として御活躍に相成って居る事は故人の定めて御満足の事と存じます。

（正会員　工博　**楠　宗道・記**）

書　評

橋梁下部構造の設計　　理工図書ＫＫ刊

針ケ谷　佶・土屋　昭・佐々木　貴一　共著

橋梁上部構造については，その設計理論は古くから検討されて構造物設計基準がすでに体系づけられ，ごく特殊なものをのぞき，それらの設計方法に関する図書を店頭において見出すのに困難を感じない。また，かなり古い書物でも，その計算理論は今日立派に通用するものが多い。しかし，下部構造については，この点，全く様子が異なっており，設計理論および計算方法などの基準があまり整備されていない事情を反映して，出版された書物は非常に少ない。その上に，最近における土質工学の目ざましい発達と新しい基礎工法と材料の輸入ないし開発が，過去の出版物を急速に無力化しつつあり，橋梁下部構造の設計に従事する技術者や学生は不便を感じることが多い。

本書はこのような実状の改善のために役立てたいと考えて書かれたものであり，橋梁下部構造設計の入門書であるとともに実用書であることを期し，現在用いられている種類の躯体および基礎は，できる限り広く取り扱って具体的にかつ平易に解説している。また，著者等は東京都において久しく橋梁下部構造の設計に実際に従事したベテランであるので，その豊富な経験を生かして，多数の計算例を示している。これらは，いずれも詳細な計算過程と設計図を有しており，初めて橋梁下部構造の設計を行なう若い技術者や学生諸君には手頃な参考書となることであろう。

ただ，不足をいわしてもらえば，本書は主としてコンクリート系の下部構造について述べられているもので，最近，都市高速道路などに用いられている鋼製橋脚などの鋼系の下部構造についての解説が不足なことである。将来，本書の続刊としてこの種下部構造の設計法について執筆されることを切望する次第である。

著者：針ケ谷・東京都江東治水事務所設計課長
　　土屋・佐々木・東京都道路建設本部橋梁課技師

体裁：Ａ５判　309 ページ，折込付図14枚，定価1200円
　　1964・8・10 刊

理工図書ＫＫ：東京都千代田区神田旅籠町３の６
　　振替・東京36087番

【首都高速道路公団　**中村正平・記**】